4 微生物やミミズなど生きものたちの恵みを受けて

■ 菌糸を見ながら堆肥づくり

小学校などから生ゴミを集めて堆肥に。
栃木県芳賀町、小久保行雄さん

土から作物への「元気印のつながり」のもとには、堆肥や土に暮らす無数の微生物・小動物の「いのちのつながり」があります。栃木県芳賀町の循環システム研究会（4、18 頁）の中心になって堆肥の製造と供給をしているのが、農業生産法人（有）ドンカメ。その代表の小久保行雄さんは、微生物の動きに注目しながら良質堆肥づくりをしています。

小久保さんの堆肥は、生ゴミをカンナクズやモミガラに混ぜて、微生物が働きやすい水分と栄養条件に調整し、まず大きなドラムに入れて回転させながら分解・発酵させます。一昼夜すると、生ゴミは魚の骨が残るくらいに分解されます。微生物の大きな力ですね。

次に大きなハウスの発酵槽に移し約 3 カ月間分解・発酵させますが、堆積した堆肥の表面近くには、微生物の菌糸の層がきれいに現われます（下右の写真）。この白い菌糸の層が乾いてくれば分解が休止中。そのような分解状況を見ながら、水分を補給したり、積む高さを高くしたりして、微生物の分解・発酵がスムーズにすすむ環境をつくっていきます。

■ 堆肥のまわりは、生きものワンダーランド

このようにして微生物がつくった堆肥を土に施すとどうなるか？　プランターの土の表面に 1cm

生ゴミはカンナクズと混ぜて回転ドラムへ

堆積した表面近くには菌糸の層ができる